

「民族復興期」の中欧チェコにおける民衆文化の成立と展開

内 藤 久 子*

Ein Beitrag zur Entstehung und Entwicklung der tschechischen Volkskultur

Mitteleuropas im Zeitalter der Nationalwiedergeburt

NAITO Hisako*

キーワード：民族復興 [再生] (Die Nationalwiedergeburt / Národní Obrození), ヨーゼフ主義 (Der Josephinismus), ボヘミア愛郷主義 (Die Heimatbewegung der Böhmisches Länder, / Der Bohemismus), 文化的復活 マティツェ運動 (Die Kulturrestauration die Matice Bewegung), 民衆文化 (Die Volkskultur)

はじめに

本稿は、1526年以降（1918年までの間）、ハプスブルク帝国の直屬領にあった「チェコ」（ボヘミアとモラヴィア両地方からなる）を舞台に、啓蒙絶対主義体制の時代からブルジョア市民階級の台頭という時代の著しい転換期に着目し、同時代に生じた「民族復興運動」の諸相について論じるものである。すなわち、変容する社会において芸術がどのような役割を担ったのか、その足跡を辿りながら、チェコ史において「民族復興期」と称された18世紀末から19世紀前半の、いわゆる貴族文化から民衆文化への移行期、言い換えるなら、当時、下層階級に置かれていたチェコ民衆の文化（つまり民族文化）の成立期へと筆を進めながら、文化的ナショナリズム運動の意味を担うものとなった地域文化のありようを、ハプスブルク帝国の文化政策とも関係づけつつ、同時代の文化的ダイナミズムの様態について明らかにするのがねらいである。そして、宮廷文化（ウィーン宮廷と関わりをもったドイツ系ないしオーストリア系ボヘミア貴族による文化）からチェコ民衆の文化へと移り変わるそのプロセスにおいて、ドイツ化政策を推進しようとするハプスブルク家の支配のもとで、いかにして「チェコ人民の文化」が形成されていったのかを、「芸術の社会化」のプロセスとも照応させて考察したいと思う。そこでは、農民出身のカントル¹や司祭による文化活動、何よりも、チェコ語や民謡等、民族精神に満ちたフォークロアの世界に生きる農民層とチェコ人知識人ととの接触、さらにドイツ系ボヘミア貴族らによる支援の状況などが論じられることになる。

こうして18世紀末から19世紀前半に生じた「民族再生運動」（1780-1848）は、より具体的には言語や文学、それに音芸術の復興と創成という表現領域を通して進められ、知識人のみならず一般大

* 鳥取大学・地域学部・地域文化学科・地域文化構造論講座

衆へと浸透していった。その局面は、前述のように、オーストリア皇帝ヨーゼフ二世の政策を発端としながら、ドイツ人貴族の不满がチェコ人民を支える構図となった結果、チェコ人の民族復興は、「ボヘミア愛郷主義」ならびに「文化的復活」という具体的な様相を呈するものとなったのである。

さて、ブルジョア市民階級が台頭してくる時代を迎え、芸術もまた公共化ないし社会化が推し進められようとしていた。とりわけウィーンやパリといった大都市では、まず公的劇場で催される公開演奏会²⁾が花盛りであった。18世紀における比較的少人数の均質で教養ある聴衆を対象としていた音楽活動も、やがて19世紀を迎える頃には、大人数で種々雑多な中産階級の聴衆を対象としたものに様変わりしたのである。このようにヨーロッパの音楽界は、芸術のパトロン(庇護者)であった宮廷から中産階級層の支持を得た公開演奏会へとその重心を移しながら、19世紀初期に見られたようなサロン・コンサートや慈善演奏会等を経て、その後期には、まさに今日の演奏会スタイルであるリサイタルや定期演奏会という形式を取るようになった。こうした演奏会形式の諸変化からも、自ずと芸術活動が貴族から民衆の手に移っていく様子を窺い知ることができる。また当該文化のありようも、ウィーン宮廷と関係をもつドイツ系チェコ人の文化から農民出身のカントルや司祭による、いわゆる(農民文化を含む)チェコ民族に固有の文化を形成していく方向へとその様相を変貌させていったのである。さらにフォークロアを軸とする国民文化の形成に向けた動きは、「民族復興期」という文化ナショナリズムの時代を体験しながら、知識人のみならず一般大衆にまで広く浸透していった。以下、ハプスブルク帝国下のチェコ地域が文化的ナショナリズムを推進していく中で、如何にして自文化の確立を目指し、民衆文化の獲得へと進んでいったのかを、帝国とチェコ地域、双方の視座から紐解いてみることにしよう。

「民族復興運動」の背景：表象文化における大衆化への契機

1：1620年「白山の戦い」での敗北

17世紀から18世紀にかけての、いわゆる暗黒時代の発端は、1620年に勃発した「白山の戦い」での敗北に起因するものであった。「白山の戦い」とは即ち、30年戦争の最中、ボヘミア・プロテスタント派とカトリック・ハプスブルク家の間に生じた封建的闘争であり、「ドイツ人貴族及びチェコ人貴族からなるボヘミア・プロテスタント派の寡頭政治が国王に外国人を立てようとしたのに対抗して、カトリック教徒のハプスブルク家君主がボヘミア王位に食指をのぼそうとしたことから勃発した」といわれる。これによって、チェコ地域は完全に疲弊し、チェコ人自身の指導者や自らが選んだ宗教(フス派)、それに広範囲にわたるチェコ語の使用権や歴史的自治権等をほぼ喪失することとなった。さらに貴族層の四分の一、およびブルジョアジーの四分の一に加え、チェコ兄弟団フス派を含むチェコ人知識階級の中核およそ3万6千世帯が追放されるか、もしくは自発的に国外への移住を余儀なくされたのである。無論、貴族の所領は没収されて、外国人、とりわけウィーン宮廷と関わりをもつ人達に分配されたという。その結果、ボヘミア、モラヴィアの人口は約300万から90万に減少し³⁾、それらの空いた土地にはドイツ人が数多く入植し、以降プラハは、19世紀半ばまでにドイツ人の都市と化したのである。当然の事ながら、カトリックのみが公認の宗教として認められる一方、チェコ人の文化遺産はことごとく破壊された。公機関や社交界でも、ドイツ語が公用語として用いられ、貴族やブルジョアジーの唯一の使用言語となった。他方、チェコ語は最下級の教区学校で教えられるだけとなり、下僕や農民たちが使用する不完全な言語として位置づけら

れた。啓蒙専制君主のマリア・テレジアや、特にヨーゼフ二世は、ハプスブルク家の全所領において、ドイツ語による「公的生活を完全に統一」し、その中央集権化ならびに画一化を強く望んだのである。そのことが一つの要因となって、逆にオーストリア貴族たちがチェコ人知識階級の運動を支援する側に回るようになり、最終的に、チェコ人民による「民族復興運動」が生じたとされる。またこうした動きは、J.F. ザツェクの言うように、啓蒙主義とフランス革命に由来するヨーロッパ大陸全体の解放運動の一部であったとも考えられる他、やはり国外の合理主義とロマン主義の影響に対するボヘミア独特の、いわばチェコ人独特の反応であったともいえるだろう。⁴⁾

ところで、1627年に発令されたヨーゼフ二世の勅令は、ドイツ語とチェコ語に対し同等の地位を与えることになったが為に、ボヘミア宮廷公文書館が閉鎖されて行政機関がウィーンに中央集権化される1749年までの間、公式文書では両方の言語で並記されることとなった。但し、文学におけるチェコ語の基盤は17世紀の内に急速に沈下を見せ、1620年から2世代を経ると、チェコ語は概して「下層階級の人たちが話す言葉」に転じたのである。こうして18世紀になるまでチェコ語は上層階級にはほとんど知られることがなかったのだが、但し村の学校で教育を受けた音楽家たちは、実際にチェコ語を話していたと伝えられている。ときに、立法上のあらゆる権限は、ハプスブルク皇帝、つまり反宗教改革の推進者であったフェルディナント二世（在位1619-37年）とその後継者らに授けられることになり、それは18世紀まで存続したが、さらに「白山の戦い」勃発までの責任をハプスブルク帝国に忠誠を誓わなかったボヘミア貴族や市民らにも負わせたのである。そして1723年、ボヘミア王に即位したカレル六世の戴冠式は、プラハに居城を構えた王族の最後の晴れ舞台となったのである。⁵⁾

- 2 啓蒙専制君主によるドイツ化政策： ヨーゼフ主義⁶⁾

これまでのドイツ化政策の中で、確かにドイツ語とドイツ文化は、チェコ人の間にも浸透していった。というも、まずボヘミアの貴族たちがドイツ騎士制度の魅力の虜になった為であるといった説が有力視されているが、それに乗じて、さらにヨーゼフ二世は自ら、ドイツ化政策の一環として、帝国を近代的な強国にしたいと願い、一層の中央集権化を進めていったのである。

1620年の戦いの後、チェコ人は大部分が農奴の地位に落とされ、長い間、屈辱的な生活を強いられる運命にあった。しかしながら、18世紀後半にもなると、ボヘミアの地にも漸く民族的自覚の兆しが見え始めてきた。それを促したのが、オーストリアの啓蒙君主政治である。即ち、ヨーゼフ二世が諸地域の伝統を無視し、自らドイツ化政策の一環として帝国を近代的な強国にしたいと願い、一層中央集権的な支配を実現しようとする、逆にボヘミアの貴族たちは皆猛反発し、ボヘミア地方の歴史的特殊性を主張するとともに、長い間農民と都市下層民の言葉となっていたチェコ語にも強い関心を抱くようになっていく。⁷⁾

一方で、オーストリア帝国の直属領としてのチェコ地域の増強と結束のため、マリア・テレジアとヨーゼフ二世は農民階級のドイツ語化を試みる。テレジアの治世（1740-80）には初等学校でのドイツ語が義務づけられ（1774）、さらにヨーゼフ二世の治世（1780-90）の時にはギムナジウムでのチェコ語の使用が禁じられた（1780）のに加えて、1784年以後のプラハ大学での講義は、従来どおりラテン語で講義された神学と法学を除き、あらゆる講義がドイツ語で行われることになった。但し、司祭になるための規制が緩和された結果、18世紀末には教区司祭の多数をチェコ語を話す司祭が占めるようになり、母国語への愛着をいっそう深めていくことになる。ヨーゼフ二世

の改革は、結局のところ、チェコ人民の教養階級を築く結果になったといえよう。彼の教育改革の中核は、1775年に国内のイエズス会を解散し（因みにイエズス会は17-18世紀の初頭までのオーストリア文化を支配した主要機関であったが、1750年代にはその影響力がオーストリアの団結を抗う反作用を引き起し、広く有害と認められるようになった。それでも影響力は深く浸透し、かつてはボヘミアの主要都市にイエズス会の教会とセミナリウムが存在した）、さらに古典に加えて、自然科学や一般世界史、国内史をカリキュラムの基盤として新規に導入するという内容であった。⁸⁾

さて1781年に発令されたヨーゼフ二世による寛容令は、まず第一に信仰に対する寛容を回復するものであり、カトリック信仰優位を堅持した上で、他の宗教や宗教団体に対する信仰の自由・寛容の原理を公式に表明した。これによってチェコ・プロテスタント精神は解放されることになる。さらにヨーゼフ二世は検閲の権能を聖職者たちから取り上げることにより、チェコ人が中世フス時代の過去を発見し研究する契機をもたらした。第二に事実上、農奴を廃止して、才能あるチェコ農民が自由のない労働要請から漸く解放されるという内容のものであった。こうして身分の低い家庭に生まれた音楽家の多くは、農奴で一生を終わるよりもその土地を離れる道を選択できるようになった。このことは、結果として、栄光に包まれた知られざる15世紀フスの時代の輝かしい過去の歴史を研究する重大な契機となったのである。⁹⁾

ところで、ヨーゼフ二世が農奴制を廃止した最大の理由は、いわゆる農村で人口爆発が生じたことに起因すると言われている。この農奴解放によって農民の都市への流入が特に1750年頃から顕著となり、その結果、当然チェコ語を話す農村出身者が都市に流入し、チェコの知識人らの間に、プラハへ流入する農民出身者を見て、まずチェコ語やチェコ文化を見直す動きが生じてくる。ヨーゼフは依然としてチェコ人の中で最も民族意識の強い社会層である農民に移動の自由を許し、農民の子弟が職人として技術を身につけて、高等教育を受ける為に町に出る権利を認めたのである。こうしたヨーゼフの農民解放は農民の生活に安定を与え、彼が信仰の自由を宣言し、また農民に学校を与えたことと相俟って、チェコ人に新しい生気が芽生えてくる。さらにボヘミアでは、漸く中産階級が台頭し、農業社会から産業社会への移行が始まり、それとともに、彼らの間には、フス運動や宗教改革の遠い記憶が蘇る。こうして富裕な貴族の愛国的運動（ボヘミア愛郷主義）と中産階級の進歩的な民族運動とが並行する中で、評論家・歴史家・詩人らによる文化的覚醒が確かなかたちで進められていったのである。¹⁰⁾

- 3 チェコ地域におけるドイツ系ボヘミア人貴族の宮廷文化

「白山の戦い」(1620)で敗北を帰して以来、同時代のチェコ人貴族や知識人たちの多くは国外に亡命し、いわゆる芸術家亡命の時代を迎える。チェコ地域に残留したカトリックの音楽家たちは、地方に点在するカトリックの教会や修道院や、地方の居城（特にドイツ系貴族の場合）において音楽活動を実践していった。例えば、中部モラヴィア地方にあるクロムニェジーシュ城（1664-95）ではカール・リーヒテンシュタイン カステルコルン公が、地元音楽家のパヴェル・ヨゼフ・ヴェイヴァノフスキー（Pavel Josef Vejvanovský, 1640-1693）を中心にチェコ固有のバロック音楽を展開する一方、西南モラヴィア地方のヤロムニェジツェ城（1706-52）では、かなりの規模の楽団を抱えており、自らリュート奏者であった J.A. クヴェステンベルク伯（1678-1752）の下、地元農民出身の楽長 F.V. ミーチャ（František Václav Míča, 1694-1744）が、当時代に唯一チェコ語のリブレットによるオペラ《モラヴィア地方ヤロムニェジツェの生まれ》（1730）を作曲した。因みに同オペ

ラの冒頭を飾る旋律には、F. スシルが収集した民謡「おお、愛 O, Lásko」の冒頭に由来するフレーズの引用が見られる。また F.A. シュボルク伯（1662-1738）はホルン音楽とオペラに関心を寄せたと伝えられており、さらに多くのオペラ一座を自らの私設劇場（1701年に建設）に呼び寄せてイタリア・オペラを上演した。

チェコの音楽学者 Z. ピルコヴァーが指摘しているのは、「18世紀のチェコ音楽」を同時代のイタリアやオーストリア、それにドイツの音楽と比較した場合、その基本的な違いというのは、この地域に皇帝の宮廷の庇護のもとで上演されるような宮廷オペラが存在していなかったという点である。そして、この皇帝の宮廷に代わる役目を担ったのが、当時地方に散在していた貴族の居城や地方の修道院および教会であった。特にモラヴィア地方では ヤロムニェジツェ、クロムニェジーシュ、ヴィシュコフ、ホレショフなどが拠点となっていたのに対し、ボヘミア地方では当時イタリア・オペラのパトロンであったシュボルク（F.A.Sporck）伯がブラハとククスに劇場を所有し、興業師 A. デンツィオ（Antonio Denzio）を雇って劇場監督を任せていた。18世紀になるとブラハとブルノに公的劇場が開幕したが、これらの劇場もまたイタリア人興行師の活動と深く関係していたと推される。勿論こうした劇場は、宮廷や貴族のオペラよりもさらに強力なインパクトを社会に与えたと考えられる。何よりもチェコ語のリブレットによるイタリア・オペラの上演は、修道院の音楽教師や作曲家たちにも民俗的な意識を自覚させる一つの契機となったのは必至で、豊かな民謡のイントネーションに接する機会を人々に与えるものとなったのである。¹¹⁾

加えて、当時のチェコ地方の音楽の浸透状況を最もよくあらわしているのが、英国の旅行家チャールズ・バーニー（Charles Burney, 1726-1818）の旅行記であろう。¹²⁾ 彼は1772年9月13日にウィーンを立ち、モラヴィアからボヘミア地方を経てブラハに入り、17日にはドレスデンへと向かった。この旅を通じて彼は、「この地には音楽演奏が大変活発で、既にここには大オーケストラが存在している」として驚愕し、「チェコ人をイタリア人に次ぐヨーロッパで最も音楽に卓越した民族である」¹³⁾ と記した。さらに当時の様子にふれて次のようにも書き留めている。「ボヘミア貴族が自らの邸宅に音楽家を置いていることは、これまでも旅行者らから聞き及んでいたが、そうなるのもごく当然のことであろう。なぜならばボヘミア王国のすべての町や村では、農夫の子供も商人の子供も皆、一般の初等教育の場で既に音楽の教育が施されているからだ。ただブラハだけは別で、音楽は学校教育の一環に含まれず、音楽家は地方から連れて来られたようである。」¹⁴⁾ 少なくともバーニーのこうした旅行記は、18世紀後半の周縁地方におけるチェコ人の豊かな音楽生活の一端を垣間見させてくれるだろう。すでに17世紀を過ぎる頃には、各町村では庶民の間に楽器の演奏に対する関心が徐々に高まりを見せており、やがて音楽や舞踊は庶民生活の一部として人々の間に浸透していった。むろん地方に住む貴族たちもまた、自ら所有する居城のカペレを拠点としながら、器楽を中心とする独自の発展を押し進めていったのである。

18世紀、「カントル」の文化活動 農村の音楽生活

厳しいドイツ化政策が推進されていったにもかかわらず、18世紀になるとチェコ語による民衆オペラの先駆的なかたちが生まれてきた。さらに18世紀全般を通じてチェコ語の歌詞をもつ歌が作曲されるようになり、チェコ語によるクリスマス・キャロル（コレディ koledy）や民謡が次第に普及し始めた。とりわけ18世紀後半になると、よく知られた主題や時にどぎつい主題を扱った市場歌が流行した。こうして一般市民の間でも、チェコ語の歌が広く歌われるようになった。それに比して、

チェコ語の歌詞をもつ芸術歌曲はかなり少数で、実際に、上流階級ではまだチェコ語の使用は見られなかった。

その一方で、器楽の演奏は、宮廷以外の場所でも普及し始めるようになり、とりわけ市民層の音楽愛好家らの家庭に次第に浸透し、民衆の音楽は世代間を通じて伝承されていったことを窺わせている。このような状況の中で、各地方の音楽活動を伝統的な立場で支えていたのが、当時「カントル Kantor」と呼ばれた村の学校教師であった。言い換えるなら、教師は皆歌手でもあり、したがって教会の合唱団やオルガニストを率いて演奏をしたり、また楽器の奏法を教授することの他に作曲を手がけることもあったという。18世紀を通じて、チェコの村々にはこのような「カントル」たちが地元の音楽活動を啓発する立場にあったのである。何よりも18世紀頃のボヘミアでは宮廷の文化が衰退の兆しを見せ始め、特に1723年（この年、ボヘミア王に即位したカレル6世の戴冠式が執り行われた）以降はこの傾向が顕著になっていくが、周縁地方のモラヴィアだけでなく、プラハまでもが次第に地方都市あるいは田舎町へと様変わりしつつあった。そのような状況のもとで、カントルたちはいわゆる地方文化の発展を継続的に促す為に、その地で重要な役割を担うようになると共に、18世紀を通じてチェコの村々では、そうしたカントルたちが地元の音楽活動を先導していったのである。¹⁵⁾

1 民衆の音楽としての〈パストラル〉

18世紀から19世紀にかけて、かのカントルたちはそれぞれ合唱隊や指揮者として、あるいは歌手や楽器奏者として教会での音楽活動に携わると同時に、学校では本来の教師および教育者としての職務を遂行していった。さらに貴族の所有するカペレの一員もしくは宮廷楽長として、舞踊や娯楽の為に音楽を作曲したり合唱用編曲を行なうこともあった。彼らにとって、とりわけクリスマスの祝祭の詩 パストラル・ミサ に代表されるような パストラル（羊飼いの牧歌）を数多く作曲・編曲することが最大の関心事となっていたようだ。言い換えるなら、カントルらの創作活動の中で最も代表的なジャンルであった〈パストラル〉は、様々な民俗音楽の要素を摂取しながら作曲されたものであった。それゆえに、こうしたパストラルの創作が意味するのは、おそらく当時、社会的に下層民であったチェコ人民衆の精神性を歌に重ねつつ、さらに18世紀末から19世紀前半にかけて展開していった「民族復興」の為に、つまり新時代に相応しい国民文化の創造につながるような、創作上の一つの基盤を提示したと考えられる。実際にパストラルに吸収された様々な民俗音楽の要素は、その叙情的な表現形式を通しても伝えられるだろう。また民俗舞踊を伴奏する民俗楽器の響きを通して（ドゥディ奏者やフデツ奏者らによる）チェコの性質は強く喚起されてくる。具体的にはモラヴィア中部ハナー地方や同東部のヴァラシュコ地方の民謡や民俗舞曲のモチーフがこれらのパストラルの中に浸透していることを容易に確かめることができる。その好例として《子守歌のパストラル》（18世紀後半頃に書かれた作者不詳のクリスマス・パストラル）が挙げられる。そこには明らかに k.J. エルベン収集のボヘミア民謡〈子守歌（牧童のゆりかご） Kolibavky〉と同じ旋律が鳴り響いていることにすぐさま気づくであろう。

ときに、ボヘミア東部地方出身のカントルとして名高い J.S.J. リバ（Jakub Simon Jan Ryba, 1765-1815）作の〈クリスマス・パストラル〉、その中でもトシェビッチのクリスマス・ミサ おお、フス師よ“ Hej, mistře”（1796）は、羊飼いの民俗的な場面を描いた代表的な作品であり、そこには民俗音楽の諸要素が曲中にちりばめられており、何よりもチェコ語の歌詞に節付けされたもの

であることに注目したい。またこの他のリバの作品としては、以下に示した《(12のボヘミアの歌より) 満足した農夫 Spokojený sedlák》(1800)が示すように、農民の生活を題材とした牧歌風のボヘミア民謡に類する旋律を伴う、非常に豊かな表現のチェコ語の歌を見いだすことができる。歌詞の内容は実に穏やかな田園生活を描写するもので、まさに共通の美意識としての自文化のイメージを構築しているといえるだろう。

《満足した農夫》(1800)

S moci Boží, v poli zboží počína mi zrát, nemám mnoho: Co je z toho?

Směle mohu spát, směle mohu spát,

[(邦訳) 全能なる神のおかげで、畑には作物が実り始める、そう多くはないが： いいじゃないか？ (これで) 心配せずに眠ることができるだろう、]

2 民俗舞曲の編曲と民俗オペラ

同時代には、さらに中部モラヴィア地方の〈ハナー舞曲〉やモラヴィア地方東部の〈ヴァラシスコ舞曲〉といった民俗舞踊を様式化した作品もまた好んで書かれた。これらの編曲は、いわば「伝統的な音楽文化の機能を再評価する」という重大な意味を担っていたとともに、19世紀に生じた「フォークロリズム (民俗主義)」の音楽のまさに原初的な段階であったとも考えられるだろう。とりわけその伴奏法において顕著な民族性を放つのは、いわゆる「旋法」の巧みな使用法である。例えば、1700年頃に書かれた《ハナー地方の舞曲》および《ヴァラシスコ地方の舞曲》は、ともにリディア旋法の響きを呈しており、その響きがある種の「チェコ性」を喚起させる一つの要因となっているのも衆目の一致するところであろう。

さらにハナー地方に固有の方言を含むテキストを用いた、いわゆる民衆オペラのジャンルに属する〈ハナー・オペラ〉(中部モラヴィアのハナー地方のオペラの意)は、19世紀における「国民オペラ」の先駆的なジャンルとして注目されるもので、同地方のオペラ創作では、およそ1740年頃からテキストに方言が頻繁に取り入れられるようになり、そのような方言が必然的に「音楽」にも反映されて、ある種の民俗的なイントネーションを喚起する要因にもなっていると見ることができる。ヤン・アントシュ (Jan Antoš) 作のオペレッタ《農民の自由をめぐるオペレッタ Operetta o sedlské svobodě》(写譜1779年)もそうした作品の一つに数えられるが、やはり方言の使用は、ある種の「民俗性 (lidovost)」、「土着性」、「地域性」を表出する重要な鍵となり得るだろう。また同オペレッタの特色は、タイトルやテキストの内容が示すように、社会的なテーマをもとに劇が展開していくことにあるとともに、音楽的にはポルカ風のリズムを駆使して牧歌的な独特の雰囲気を出しているといえよう。

《農民の自由をめぐるオペレッタ》のアンソロジー (1779)

Sedláci, chalupníci, baráčníci,

vejměníci, nadenici,

řeměsníci, všickni poddáci !

Moci naši všem nařizujeme,

pod vypálením příkazujeme:

農夫たち、小作人たち、小屋人たち、

放浪者たち、日雇い人たち

職人たち、皆、被支配者よ！

我々は権力をもってすべてに命令しよう、

各一軒より一人男性を出せ：

z každého numeru jednoho muže,	さもなくば、その家を焼き討ちにしてやる、
neb to jináč byt nemůže,	他に道はないぞ、
čtvrt hodinou postavte, k selský vojně,	15分以内に並ばせる、農民の闘いに、
bez měškání dostavte.	遅れずに送り出せ。

(* 下線部分は方言)

一般に、18世紀のチェコにおける「民俗的オペラ」の題材は、アントシュの作品例からもわかるように、同時代に起こった重要な社会的出来事や政治・戦争・農民の暴動などを描いた実に庶民的な内容であった。こうしたカントルらの音楽活動について、チェコの音楽学者J. ラツェクもまた、次のような見解を述べている。即ち、「チェコにおいて古典派やロマン派を復興しようとする動きが見られたのとちょうど同じ時期に、地方におけるカントルの音楽が郊外の学校で発展を見たが、このようなカントルの音楽を除いてチェコ国民音楽の形成に至る全貌を説明することは難しいだろう。¹¹⁶⁾」そしてヨーロッパ周縁地域における音楽創作では、民謡や民俗舞曲を通して強く強調されるような「音楽上の方言」によって多くの影響を受けたこともまた確かであった。しかもそうした民俗音楽の諸相を考慮することなく、チェコ地域に固有の旋律型について語ることもまた、やはり不可能に近いと思われる。

3 チェコ民衆の文化の成立と「楽師的伝統」¹¹⁷⁾

18世紀のチェコにおいてカントルたちが民謡の旋律を彼らの作品の中へと吸収しながら、<クリスマス・パストラル>のような作品を創作したり、また<ハナー・オペラ>と呼ばれるモラヴィア中部のハナー地方の方言を含む庶民的なオペラを作曲することによって、彼らの音楽は確かにチェコ音楽の発展に寄与したと見ることができるだろう。とりわけその意味は、基層文化に深く根ざした民衆的気質を備えもつ「楽師的伝統」の形成にあったと考えられるように、17世紀から18世紀にかけて顕著に見られた周縁地域における様々な音楽活動を、19世紀における民族文化の成立に向けた重要な基層的要素として位置づけるという考えは、十分に根拠をもち得るものと思われる。逆説的に言えば、チェコ音楽の創作においてチェコ語と民俗音楽の諸要素をともに創作の内部へと組み入れながら、同地域の音楽文化の伝統は、「民族復興(民族再生)」の時代に重要な役割を果たすまでに、豊かな発展を遂げていったのである。

こうして「チェコ国民音楽」という意識がまだ熟しているとは言い難い18世紀末頃までの音楽活動を、地方文化の発展における、いわば揺籃期として位置づけながら、チェコの音楽創作がその発展の最初期から「地域の伝統文化」に依拠する方向を示していたということこそ、この小国の音楽史がヨーロッパ文化の潮流に揺れつつも、独自のアイデンティティを保持できた最大の要因ではなかったかと思われる。

チェコにおけるナショナリズム運動の特色は、何よりも言語・文学・音楽を中心とする文化ナショナリズムが、ハプスブルク帝国からの分離と近代国家の成立を標榜する運動の政治ナショナリズムに先んじるかたちで展開されたことにあったと言われる。¹⁸⁾19世紀前期のロマン主義的な民族主義の思想は、チェコ人の国民的な芸術音楽の復興に際し、さらに政治的な意味合いをもって受容された。以下の考察では、チェコ語、チェコ文学、チェコ国民音楽の復興と創成へと進展する文化ナショナリズム運動としての「民族復興運動」について洞察することにしよう。即ち、チェコ人の

民族的自覚がいかにして芽生え、民族覚醒といったものがとりわけ「文化的復活」を軸にどのように展開していったのか、そしてその先駆的なボヘミア的愛郷主義の現象がどのような状況の中から生まれてきたのか、まず民族復興の運動が生じた背景について述べ、さらに音芸術における「民族復興」がどのようにしてもたらされたのかについて、詳しく見ていくことにしよう。

民族復興運動

民族覚醒の運動は、18世紀末から19世紀の1870年代にかけて東欧の諸民族に広く見られた文化運動であり、この運動は諸民族の歴史的条件の差異により、次の2つのタイプに分けられる。一つは、自ら封建的あるいはブルジョア的支配階級をもつ場合で、ポーランド人、チェコ人、ハンガリー人、クロアチア人、ルーマニア人、ギリシャ人などによって推進されたもの、二つ目はそのような支配階級をかつては有していたとしても当時はもっていなかったスロヴァキア人、スロベニア人、セルビア人、ブルガリア人などの場合である。何れにせよ、民族覚醒の運動はまず文化の領域で始まり、のちに政治的色彩を強めていったと思われる。いわばこの運動は強大な異民族支配の下で、民族がその過去を忘却し消滅するかもしれないという危機感から発したものと考えることができよう。そして運動の主たる関心は真っ先に言語と歴史に向けられたのだが、まず第一のタイプに属する民族ではクロアチアを除いて、既に運動の開始期には民族語（文章語）を有しており、運動の初期には既に啓蒙思想を摂取して言語や歴史研究においても先んじていた。特に民族の起源の問題が関心を引き、その論争が「スラヴ学」を誕生・発展させるものとなったのである。他方、コラールやシャファーリクらは、スラヴ民族がゲルマン、ロマンス系諸民族と同じように古い起源を有し、その数と勢力においてそれらの民族を凌駕していたことを強調した。また歴史的関心は、過去の民族的栄光の想起ともなって表れた。例えばチェコ人はフス戦争（フス派革命；1419-36）を賛美したことで知られる。¹⁹⁾つまりロマン主義時代の覚醒者らがヤン・フス〔プラハ大学総長で教会の腐敗に対処して反カトリックの思想を強く唱えて弾圧される；c.1371-1415〕の時代を再発見し、それをチェコ史の核心にすえたのである。こうした復興運動の思想は、広汎な「民衆的基盤」をもっていたがゆえに、当然、民主的性格を帯びていたと考えられる。

ところで、マサリクをはじめとする宗教学派の説では、チェコ人の復興とは、こうした「フス時代の宗教的・民族的精神との新たな接触」であることが強調されているが²⁰⁾とりわけヨーゼフ体制の広汎な寛容政策がそれを可能にしたとされる。つまり、1781年発令のヨーゼフ二世の寛容令は、既述のように「チェコ人プロテスタント精神を解放させ、彼が検閲の権能を聖職者から剥奪したが為に、栄光に包まれたフス時代の過去の歴史を再び研究し得る一つの契機を与えるものとなった」というのが、この説である。それに対し、政治や文芸学派らの見解では、帝国領土の行政を完全にウィーンに集中させようとしたヨーゼフ二世の政策が遅滞きながらボヘミア貴族を地獄的愛郷主義者にしたという。さらに第三の学派であるマルクス主義者を含むグループは、社会・経済的競争の奨励、および1781年の農奴負担の軽減を、復興運動の理由に掲げている。

ヨーゼフは、依然としてチェコ人の中で最も民族意識の強い社会層である農民に移動の自由を認め、農民の子弟が職人としての技術を身につけたり、高等教育を受けるために町に出る権利をも認めた。何れにせよ、民族復興運動の第一の局面は、明らかに「ボヘミア愛郷主義」(J.F. ザツェク)というかたちで顕現し、つまり、ボヘミア貴族・学者グループ、主として聖職についている歴史家(ヨゼフ・ドブロフスキー他)らの手による運動となった。さらに第二の局面は、チェコ人の文化

的復活、即ち、民族覚醒者の第2世代にあたるヨゼフ・ユングマンや、フランティシェク・パラツキー、ヤーン・コラル、パヴェル・シャファジーク(シャファーク)ら、下層中産階級かやや裕福な農民層の子弟、モラヴィアやスロヴァキア出身のルター派で、彼らは滅亡寸前のチェコ民族を再生させようとの大願を抱いていた。彼らは言語と文学の復興を第一とし、不完全な方言であるチェコ語を民族文学を生むのに相応しい洗練された媒介物に変えることが必要であると考えた。こうして文法を整え、辞書を編纂し、純文学や学術作品を書き、雑誌や新聞を発行し、古いボヘミアの文化施設をチェコ人の所有として新たに再建したのである。²¹⁾

- 1 「ボヘミア愛郷主義」とその背景

18世紀末から19世紀初頭のチェコ地域において大都市であったプラハ、ブルノ、オロモウツ、オパヴァ等では、無論ドイツ語が優勢であった。当時期、このチェコ地域を支配していた貴族らは、基本的にはウィーン宮廷と結びついており、言語の面ではドイツ語の世界で暮らしていた。即ち、1620年の戦いでその多くがプロテスタントであったチェコの土着貴族らは、カトリックのハプスブルク家に敗北し、その結果、土着の貴族たちは追放されて、そこに新たにオーストリア等から新興貴族が移入し、その土地の支配者となったのである。当然のことながら、チェコ地域の支配者らはドイツ語の文化圏に属していたために、プラハ市民(商人や職人といった都市住民)の間でもドイツ語が幅を利かせていた。

但し、何れの言語を使用する者も、「ドイツ人」「チェコ人」という意識ではなく、土地に根ざした地域意識を強くもっており、むしろ「ボヘミア人」「モラヴィア人」「シレジア人」という地域意識の方が強かったといわれる。従って貴族らの中には、オーストリア人であるという人々も多く存在していた為、チェコ地方での言語の差異というものは、むしろ身分の差のようなものであったと推されよう。²²⁾

ではこのような動きの背景に、一体どのような力が働いていたのだろうか。言い換えるなら、こうした民族文化の運動を推進していく上で、確かにチェコの知識人たちには、潤沢な資金などは到底無く、その上チェコ人貴族自体も無力化しており、かたや中産階級もまた育ってはいなかったのである。こうした状況のもとで、実際にチェコの知識人たちによる文化運動に直接、資金を提供したのは、つまりこのチェコという地域を支配していたドイツ文化圏の中にあるドイツ系貴族たちであったことは驚愕にあたいするであろう。その理由として、ドイツ系貴族たちは、ヨーゼフ二世の改革によって自分たちがチェコにおいて掌握していた特権が次第に脅かされるようになり、それゆえ彼らは、おそらく自らの封建的特権を遵守するために、逆に、かつてチェコ王国だった地域の自立性を強調する必要に迫られたのである。こうして貴族らによる「愛郷主義」(チェコ王国は帝国に組み込まれているが、一定の独立性は維持しているとする)を推進していくことで、つまり具体的にはチェコ人知識人の文化運動に資金を提供することによって、彼らの役目は、まさにチェコ人に成り代わり、チェコ人独自の文化や歴史の存在をウィーンに向けて発信することとなったのである。

加えてW.M. ジョンストンが指摘するのは、ボヘミア愛郷主義のいわば精神的な支柱となったのは、何よりも「ライブニツ調和説」であるという。²³⁾つまり19世紀前半のボヘミア社会を覆っていたのは、(ボヘミア哲学の生みの親ともいべき)ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライブニツ(1646-1716)の理論だとする考え方である。よく知られるように、ライブニツは1712年から14年の

間ウィーンに滞在しており、1718年にその地で『単子(モナド)』ならびに『自然と恩寵の原理』を執筆した。ここで彼の調和説について、簡単に説明しておこう。ジョンストンによれば、「宇宙は、無数と称される知覚能力を備える存在から構成されており、神を頂点とするヒエラルキーを形成し、その単子は一つ一つが独立して、他のモナドと結びついている。そして宇宙は隅々まで調和の精神に満たされており、神は自律的モナドが予定調和説の中で機能するようにと配慮する」というものである。このライプニツの調和説は、さらにボヘミア生まれの論理学者・神学者ベルナルト・ボルツァリーノ(1781-1848)らに継承されるが、彼を含むカトリック教徒たちは、19世紀前半に、このような思想的に「ヨーゼフ主義」とも言うべき運動を推進していったのである。より具体的に言えば、この思想の中心軸となるのは、学校を建設したり、合理的神学を普及することで、何よりも「チェコ人とドイツ人の融和を図る」というものであった。無論ボヘミアの指導者らは、地方の実情に合わせて合理的に少しずつ改革を実行することを望ましいとしながら、人文主義的教育と実践的訓練との一体化を目指したのである。またボヘミアの教師たちは、一方で生徒らに社会改革や政治参加の重要性を教示したという。その影響は1860年以降に顕著にあらわれ、帝国内でのチェコの自治権を要求する運動を指導したのは、これらの学校で教えを受けた世代のチェコ人だったとも言われている。尤も、1850年になるとチェコ系とドイツ系間の民族抗争が激しさを増し、ライプニツ調和説は行き詰まりを見せ始める。こうしてボヘミアの思想家たちは、19世紀も後半になると、先のヨーゼフ主義やボヘミア愛郷主義の限界を悟ることとなり、これまでのチェコ人とドイツ人の融和の時代は崩壊の兆しを露呈し始め、やがて迎える世紀末文化に影を落とすこととなるのであった。

一方、ナポレオン時代のウィーン政府の政策もまた、もはやこうしたチェコ人の愛郷主義を仇やおろそかにできない状況に追い込まれようとしていた。即ち、ナポレオン率いるフランス国民軍に対抗するために、オーストリアもまた国民を動員しようと愛国心に訴える必要が十分にあったからだ。しかしながら、地域主義が強かった為に、むしろそれらの地域の愛郷心に訴えて、自分等の故郷は、自らが守り抜くといった方が強くアピールできると判断したようである。こうしてウィーン政府は漸くヨーゼフの中央集権政策を緩和せざるを得なくなり、幸運にもチェコ人の文化運動にとってここに有利な条件が整うこととなった。このように、「それぞれの愛郷心を認める」という考え方は、さらに農民層へも浸透し、その結果は、彼らの文化である「フォークロアへの開眼」という進むべき道を眼前に開くものとなったのである。²⁴⁾

- 2 文化的復活

民族的覚醒は、こうしてスラヴ族の全地域に及ぶようになり、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー(Johann Gottfried Herder, 1744-1803)の理論に触発されて、やがて彼の主張するように「スラヴ族には最高の運命が約束されている」という確信を抱くようになっていく。この運動は、ポーランドやロシア、さらに南スラヴ地域の文学運動と連携を取りながら、活動を進めていった。当初、民族覚醒の運動は知識人の関心を引いただけに過ぎなかったが、徐々に一般民衆、主として農民層にも深く根をおろすようになった。その一方で、諸地方におけるゲルマン化の波は民衆層にまで浸透していった。特に言語のドイツ化は誰の目にも顕著であった。ヘルダー以来、高く評価されるようになったフォークロア音楽は、少なくとも18世紀の頃までは、当然、芸術音楽とは異なるものとして、その評価は、非音楽のレベルにまでに落とされたのである。しかしながら、19世紀に入ると、それ

まで地方の宮廷やカントルと呼ばれた村の学校教師らの活動を通して保護されてきた「民謡」(当時はまだ民謡の歌詞に書かれたチェコ語を田舎の言葉とする風潮が強く見られた)が、それまでの「地方的な存在」から、「民族の魂の自然な表出」を意味するものへと昇華されていったのである。

- 2 - 1 ヘルダーの思想：スラヴ人としての覚醒

J.G. ヘルダーが提唱した18世紀後半のロマン主義的な民謡概念や民族主義の思想は、当時普及していた啓蒙主義思想とともに、長い歳月を通して圧政下に置かれていた人々の民族意識を覚醒させるものとなった。ヘルダー自身によるスラヴ人への呼びかけは次のような言葉で始まっている。

「かつて存在した幸福な状態から深淵にはまりこんでしまったスラヴ人諸君、諸君らはずいには長い怠慢な眠りから醒める時がやってくるであろう。そして、奴隷の鎖から解き放たれて、アドリア海とカルパティア山脈、ドン河とモウダウ河に挟まれた美しい地域を再び諸君のものとしていくつしみ、そこで再び平和な労働を賛美する祝宴を開くことができるようになるであろう。」

さらに、「母国語、民族固有の伝統や文化、それにフォークロアといったものすべてが各民族のアイデンティティ(同一性)を形成する上で最も重要な要素となり、スラヴ民族にはその最高の運命が約束されている」と。²⁵⁾

ヘルダーの思想は当然スラヴ人復興に大きな影響を及ぼしたといわれるが、このヘルダーの思想をチェコの人々(とくに知識人の間で民族的な自覚が最初に芽生え始めた)は、抑圧された民族の文化的解放と発展という「民族復興」のプログラムのなかに具体化しようとし、とりわけスラヴ民族の精神文化を高く評価することによって、まさに「新しい時代のギリシャ文化」に相応するような音楽文化の発展を扇動し得るものと考えようになった。こうしてチェコ語とチェコ文学の興隆に伴って鮮明に蘇ってくる15世紀の民主的なフス教徒運動や、17世紀初頭の宗教改革への記憶を手がかりに、文学や音楽を中心とした独自の国民文化を創造することを、民族復興の明確な目標として掲げるようになっていく。中でも18世紀末の残り10年の間、ボヘミアでは文学の隆盛が顕著に見られるようになり、「チェコ語」の復活を求める抗議活動が生じたのである。

ヘルダーは何にもまして言語の重要性を説き、「民族精神(Volksgeist)」について論じた哲学者であるとともに、フランス啓蒙主義の科学的合理主義や進歩的新興に相対するロマン主義の立場に立つ理論家であった。そこでは「国民の文化的な生活全体は、彼らが共有する歴史的経験から生じるある伝統の流れから形成されてくる」と考えられているように、ヘルダーにとって「言語と文字」とは、国民の文化的認識の形成に不可分に関わるものとして重視されている。さらにヘルダーの言葉を続けよう。「人間諸集団は、共通の伝統と共通の記憶によって形成されるのであり、この伝統や記憶をつなぎ止め媒介するのが言語であり、...言語の中にはあらゆる伝統・歴史・存在の原理がある。即ち心と魂の全てがある」、また「人間は言語やその他のシンボルを用いて思考する。人間の感情や態度は、詩であれ礼拝であれ、象徴的形式により具体的に表現される」と。こうしてヘルダーのもとでは、「有機的」国民という概念は、歴史的に構築された複数の文化を意味する「cultures」という考え方に力点が置かれており、そのヴィジョンは、「歴史的記憶・言語や文学・文化的産物を介して国民が何らかの有機的の一体を作り上げること」であった。そこには政治的ナショナリズムではなく、「すべての民族集団の言語や文化の尊重は、それが文明伝播の手段となっている為」と考えられているのであり、固有の歴史的発展に従う国民が有機的にまとまりを作り上げるといふ、まさに多元的文化概念に基づいている」とタンバイアは指摘している。²⁶⁾

- 2 - 2 : 「民謡」への開眼と民謡の収集

J.G. ヘルダーは、チェコ民族の「復興」にとって、その思想のみならず、チェコ民謡の収集に際しても多大な貢献をした最初の人物として知られる。その偉大な業績の最初を飾るのが、まず《古代の民謡 Alte Volkslieder》(1773/1774年出版)であろう。この他にも2巻本の《民謡集 Volkslieder》(Leipzig 1778/1779), さらに《歌にやどる民衆の声 Stimmen der Völker in Liedern》(edited by MÜLLER, J.V., Tübingen 1807)には、それぞれ「君主の食卓、ボヘミアの歴史 Die Fürstentafel, Eine böhmische Geschichte」[《民謡集 Volkslieder》第2部(1779)から; in HERDER 1975(1778/1779): 290-294]や、「山岳の馬、ボヘミアの声 Das Ross aus Berge, Eine böhmische Sage」[《歌にやどる民衆の声 Stimmen der Völker in Liedern》(531-534頁から; in HERDER 1975(1807): 386-390)]等が収められており、これらの詩を通してチェコ人の民族感情は直截に鼓舞されたと考えられよう。

ところで、チェコの人々が自国のフォークロアを意識し始めたのは、18世紀後半にJ.G. ヘルダーがボヘミア民謡のアンソロジーを発見したことに大いに刺激を受けたためであり、中でも復興論者の目を引いたのは、農村において唯一伝承されてきたチェコ語の歌詞をもつ「民謡」であった。つまり、従来は田舎の言葉として農村でしか話されていなかったチェコ語、さらにはチェコ文学を復活させようとする動きが始まることによって、いわゆる「文化による民族の再生」が謳歌されるようになる。即ち、長い間、農村の言葉として劣位にあったチェコ語への関心は、人々の目をとりわけ「民謡」へと注がせるものとなり、19世紀前半にはチェコ人自身の手で次々と民謡が収集され、出版されるほどに急速な高まりを見せるようになった。

こうしたヘルダーの思想は、さらに次世代へと踏襲され、まず《スラヴ民謡集 Slovanské Národní Písň》を出版したボヘミア出身のフランチšek・ラディスラフ・チェラコフスキー(František Ladislav Čelakovský, 1799-1852)に引き継がれる。この収集はスメタナ、ドヴォジャーク、さらにヤナーチェクの音楽のいわば原型となったもので、とくに民謡や民族舞踊のエコー(模倣)手法といった面で重要な役割を果たしたとされる。さらにチェラコフスキーの後継者として、モラヴィア出身の民謡収集家フランチšek・スシル(František Sušil, 1804-1868)やボヘミア出身の詩人・歴史家・音楽研究家のカール・ヤロミール・エルベン(Karel Jaromír Erben, 1811-1870)らがこれに続く。こうして1835年にはスシルによる《モラヴィア民謡集 Moravské Národní Písň》が、そして《ボヘミアの歌と俚諺 Česká Písň a Říkadla》(1844-64)がエルベンの手で出版されることとなった。因みにスシルは《モラヴィア民謡集》の序文の中で、「モラヴィアのフォークロアを音楽創作に有効に活用する可能性」(1832年11月14日)について言及しているが、これらの収集の出版を機に、民謡への関心は尚一層の高まりを見せるようになり、モラヴィア地方でも次第に「フォークロアに基づく国民音楽の創造」が叫ばれるようになっていったのである。

- 2 - 3 19世紀における民族覚醒の推移：〈マティツェ運動〉の生起

19世紀において、オーストリア帝国内では一般に、「マティツェ Matice (Matica)」と呼ばれる、文化団体を中核とした「スラヴ民族覚醒(再生)運動」が進められていった。マティツェとは即ち、〈母ないし多産〉を語源とする南スラヴ語で、〈女王蜂〉を意味している。これは1826年にブダペストのセルビア人によってつくられた「マティツァ・スルプスカ」をその起源とするものであった。

具体的に言えば、これは民族語の普及や民族文化の保存を目的とした活動であるが、加えて文化財の保護や学生の学費援助、他のスラヴ地域との人的交流、雑誌や書籍の交換なども手がけていた。特に有名な組織は、1831年にプラハで創設されたチェコ人の「マティツェ・チェスカー」で、歴史家パラツキーや言語学者ユングマンらの指導を受けて、独自の雑誌を発行し、百科事典やチェコ語辞典の出版助成を行い、チェコ人知識層の民族意識の高揚に貢献した。因みにオーストリア帝国の総人口の内、スラヴ民族の占める割合は40パーセントであったという。²⁷⁾

まず最初の活動成果として注目されるのが、スラヴ言語学の父ヨゼフ・ドヴロフスキー (Josef Dobrovský, 1753-1829) の著作であろう。周知のように、彼は非常に重要な言語学および歴史学上の研究に乗り出し、『チェコの言葉と文学の歴史』(1792) を著わして、チェコ語の表現手段の機能を復活させ、つまり農民の言葉であったチェコ語を文章化したのである。さらにその領域は言語に留まらず、風俗や習慣にもスラヴ諸民族に共通のものを発見し、後に展開される「文化的汎スラヴ主義」の原点となったことで知られる。こうしたドヴロフスキーの言語学研究はヨゼフ・ユングマン (Josef Jungmann, 1773-1847) に踏襲され、さらなる学問的発展を遂げる。ユングマンは5巻からなる『チェコ語 = ドイツ語辞典』の編纂に関わり(1834-39)、弟子たちとともに「ユングマン学派」を結成して多数の外国文学(特に西欧ロマン主義文学)の翻訳を手がけた。この仕事はある意味でチェコ語を豊かな言葉にする作業につながり、『チェコ文学史』の執筆を促すこととなった。

それに続く重要な人物は、歴史学者で連邦主義者のフランティシェク・パラツキー (František Palacký, 1798-1876) であろう。彼はモラヴィア北東部出身で、一家は「チェコ兄弟団」の信奉者であったという。その功績は、『ボヘミアとモラヴィアにおけるチェコ民族の歴史』[ドイツ語版第1巻1836; チェコ語版1848] を著したことにあがるが、その中でチェコ民族とドイツ民族の対立を強調しつつ、栄光に満ちたチェコ人の歴史を描写している。とりわけ15世紀のヤン・フスによる宗教改革の時代のチェコ史に焦点を当てることで、「チェコ人がプロテスタント思想とか、権力に対抗するといった意味で西欧自由主義思想の源流に居たこと」を示そうとした。即ち、ザツェクの言う「チェコ人とは何であり、今後どうなるべきかを示すために書かれた、いわば扇動的な民族の宣伝」²⁸⁾のような書であった。つまり、「歴史書を書くということを通してチェコ人をヨーロッパ文明の流れの中に明確に位置づけることで、いわゆる辺境の民族ではないことをここにはっきりと主張した」のである。こうした考え方は「オーストリア・スラヴ主義」とも称され、オーストリア帝国内での自治という連邦構想を目指すものであるとともに、やはり文化的な民族主義の色彩が強かったといえよう。いわば帝国という枠組の中で、スラヴ民族の存続を強く希求したのである。当時の老年チェコ党を率いるパラツキーと娘婿のフランティシェク・ラディスラフ・リーゲル(1818-903)は、ドイツ統一を目指すフランクフルト国民議会には参加せず、協調路線を支持した²⁹⁾。1848年4月その旨を表明した書簡には、パラツキーがオーストリア帝国の存続の必要を述べた有名な言葉がしたためられている。

「オーストリア帝国がもうとっくに無くなっているというのなら、これを急ぎ創らなくてはならないだろう。ヨーロッパとヒューマンイズムの為に。」³⁰⁾

とりわけパラツキーは、古代スラヴ共同体の民主的性格を強調することで、それを復興運動の実践面に反映させようと考え、フス派革命をチェコ史の核心とみなしたのである。彼はチェコの民族史家として、王立ボヘミア科学協会やボヘミア民族博物館(1818年に設立; 民族文化を重視したヘルダーの思想に倣うもので、チェコ語の会報が定期的に刊行された)の会員権役員を務める一方(1827年以降、編史官として同館発行の雑誌編集を担当した)、「美術館新聞」(1827)および文化

団体（出版基金団体）「マティツェ・チェスカー」を創始し、さらに国民劇場設立委員会のメンバーとなった。それと同時に1848年から76年までの間、チェコ人の重要な政治的代弁者としても活躍している。こうして彼は汎スラヴィズムを発展させつつ、全スラヴ族に共通の文語を作り出そうとした。そして何よりもリーゲル率いる老チェコ党は、チェコ語の復権運動を広く推進していったのである。³¹⁾

2 4 文化機関の設立

ところで、民族覚醒はさまざまな文化的機関を具体的な拠り所として生じたと考えられるが、これらの設立に際して、まず貴族階級が重要な役割を務めた。1784年、学問研究の中心としてのチェコ王立科学協会が設立され、1811年にはプラハ音楽院が、1818年にはボヘミア王立博物館（いわゆる民族博物館）の創設、そして1707年に設立された理工科学校は、その後、1806年には技術教育高等学校となり、さらに1791年、プラハ大学においてチェコ語とチェコ文学の講座が創設されることになった。こうして大都市ではゲルマン化が次第に後退し、農村ではカントルや村の農民出身の司祭たちの力によって民族性の自覚が促され、民族語教育が普及していったのである。

既に述べたように、19世紀の初めになると、音楽の重心はかつての宮廷から都市へと移っていったが、そこには商業的な劇場や演奏会を行う音楽協会や自発的な歌唱の組合、新設の音楽院が生まれた。中世からのすばらしい遺産をもつプラハでは、ブダペストとともに、世紀半ばまでは実質的にドイツ的であり、行政組織や芸術組織、社会上の道德観といったものはほぼウィーンを規範としていた。チェコにおける音楽会の状況について言えば、当時最も人気があり華々しい活動を行っていたのは、外来の名人が登場する「特別慈善演奏会」であったという。定期の室内楽や管弦楽の演奏会を組織する音楽協会が設立されたのは、1803年プラハにおいてであった。そしてプラハでは1811年ウィーンよりも6年も早く音楽院が設立されたのである。最もオペラに関してはチェコ語よりもドイツ語で上演されることの方が多かったが、それでも人気を博した。即ち、19世紀初頭の主な会場となったのは、ドイツ語主体で演じられる「スラヴォフスケー劇場」と1842年に開設され主にチェコ語での上演を手がけたストーガーの「新劇場」であった。また1808年にはブルノに「フィルハーモニック協会」が創立された。やがてプラハの音楽界もその組織的基盤を固めるようになり、そこから民族性を指向する音楽が発展していったのである。東方の大都市の社交界は、急速に爵位のある貴族階級を越えて広がり、その娯楽であった舞踏会・宴会・サロン・カフェ・コンサートなどは新しく独特な職業的レパートリーを促進していった。そこでの主な出しものといえば、地方的多様性に象徴されるように、ワルツやカドリューコ、ボヘミア農民の円舞から発達したポルカや、それにチャールダーシュと呼ばれるハンガリーのジブシーの民族舞踊ヴェルブンコシュ等といった大衆音楽から派生したものであった。³²⁾

フォークロリズムの始まりを告げる18世紀末から19世紀前半の「民族復興期」の時代には、社会的にもそうした音楽の傾向を支援する動きが顕著に見られるようになった。³³⁾ というのも、時を同じくして男声合唱団「フラホル hlalol（「響き」の意）」が、1860年にニムブルクに結成され、その翌年にはプラハに、さらに翌年にはブルゼニューにも創設されたからである。また各芸術分野にわたり一流の人物で構成される「芸術家協会（Umělecká Beseda）」が1863年にプラハに設立され、そのわずか前の1862年11月18日には、チェコ文化を象徴する出来事として「国民劇場仮劇場」が開幕し、その後1868年に着手された国民劇場は13年の歳月をかけて1881年に完成をみるに至ったのである。

このような合唱団や劇場の成立の動きは、19世紀のヨーロッパ全般に見られる現象であったが、「チェコ人の為の」諸制度の実現に向けた動きというのは、やはり特別な意味をもって受けとめられる必要があるだろう。こうして社会的動勢とも連動しながら、次第に「国民音楽」樹立の悲願が達せられようとしていたのである。

むすびにかえて 民族文化の新たなる展開

民謡の収集や出版への動勢と並行して、芸術音楽も新たな展開を迎えることになる。ボヘミアでは当時チェコ民衆が音楽表現の最高のジャンルと目していたオペラ分野で、フランチšek・シュクロウプ (František Škroup, 1802-62) がチェコ語のテキストを基に《鑄掛け屋 Dráteník》(スロヴァキアの貧しい鑄掛け屋を中心人物として描いた) を創作し(1826年初演)、チェコ語によるオペラ作曲家としての地位を築こうと模索していた。一方、モラヴィア地方では、F. スシルを師と仰ぐ P. クシーシュコフスキー (Pavel Křížkovský, 1820-85) が、モラヴィアの民俗音楽に基づく優れた合唱音楽を創作しながら、いわゆる民謡の劇的要素を開拓していった。当時まだ大半のチェコの音楽家たちがドイツ・ロマン派音楽の影響の下にあるなかで、彼はチェコ的なものを模索しながら、しかも双方の要素を折衷していく書法を用いることで、国民音楽の樹立に向けた先駆的活動を推し進めていったのである。たとえば、1848年に《モラヴィア民俗詩》のテキストをもとに男声合唱曲を作曲して以来、彼はロマン主義様式に則った民謡の「合唱化」を数多く手掛けるようになる。とりわけ F. スシルが収集したモラヴィア民謡を合唱曲に編曲することを中心に、モラヴィア地方の要素に基づく「国民音楽」の創造に大きく貢献したといえよう。³⁴⁾

クシーシュコフスキーによる民謡の合唱化が示すように、「民俗主義」とも訳出される「フォークロリズム」は、こうして19世紀から20世紀初頭におけるヨーロッパの芸術音楽の傾向もしくは様式方向を示す用語となったものであるが、とりわけ19世紀「ナショナリズムの音楽」の初期にみられた(フォークロアを軸とする)フォークロリズム(民俗主義)への強い傾向は原則的として編曲、主題の引用、変奏、エコー(模倣手法によるこだま効果)といった手法によって示され、それらのパターンはすべて独立した諸形式として舞曲や歌として存在するか、或いはオペラ等の作品の一部として挿入されるというかたちを取って現われた。このように、少なくとも同時代のフォークロリズム(すなわちナショナリズム)の音楽は、「(音楽の)様式」として存在していたというよりも、古典派・ロマン派様式の一つの「傾向」として存在していたといえるだろう。

その後のチェコ国民音楽の展開は周知の通りであろう。即ち、チェコ近代音楽樹立への道を確実に推進させる強力な人物が現われた。言うまでもなく、ボヘミア楽派の創始者スメタナとフィビフ (Zdeněk Fibich, 1850-1900)、そしてドヴォジャークである。まずスメタナ (Bedřich Smetana, 1824-1884) やフィビフらは歴史的・伝説的主題に依拠した具象的な標題音楽構想を標榜して「チェコ近代音楽」を樹立しようとする一方、ドヴォジャーク (Antonín Dvořák, 1841-1904) は、ウィーンの批評家 E. ハンスリック (Eduard Hanslick, 1825-1904) や、作曲家 J. プラムス (1833-97) らの支援を得て、交響曲や室内楽曲といった純器楽曲という絶対音楽分野でチェコ国民音楽を国際的舞台に登場させる役目を果たすことになる。時は標題音楽と絶対音楽の論争の時代であり、チェコ国民音楽もまたそのようなヨーロッパ全体の音楽の潮流のなかで「国民音楽」の在り方についてまさに模索の時を迎えていた。とくにスメタナは、生前よりもその死後の20世紀初頭になってようやく「チェコ国民音楽」の創始者としての揺るぎない地位を獲得するようになった

のに対し、ドヴォジャークは、スラヴ人としての感情表出を重んじた汎スラヴ的ともいえる表現を推し進めることによって、19世紀には内外から最も国民的な作曲家として賞賛されたのである。

19世紀後半から20世紀にかけて、「民族復興」の動きはやがて次の局面を迎えながら、そうした文化による「民族復興」と「芸術の社会化」を同時進行させつつ、1918年におけるチェコスロバキア国家の成立に向けた国家政策の一環として、チェコ民族による自文化の確たる創成に向けた動きが打ち出されていったのである。それは、当時ヨーロッパにおいて進歩的思想とされた「詩と音楽の統合」という、いわば総合芸術作品を最高の芸術とみる美学思想に裏付けされた民族文化のルネサンスであったといえる。

註

1) カントルとは教会での聖歌隊歌手を指す言葉で、中世盛期以降は、教会において先唱者として聖歌のインチピットを歌う者を指すようになる。そこから、やがて合唱指導者、合唱長、或いは礼拝堂楽長を意味するようになっていったが、ただし宗教改革以降、学校では俗人の教師がカントルの地位を占めるようになった〔ザルメン 1994: 18, 23を参照〕。元来カントル(cantor)とは修道会における「神への賛歌者」であり、その為に独唱者として抜きん出た能力を持った者が適任とされていた。一方では「宮廷カントル」という地位の者もいて、王や皇帝に従った「礼拝堂付き」として、さらには司教座聖堂付きとしても活動していた。中世における宮廷カントルは、教会の合唱指揮者であり指導者でもあった。さらにいくつかの教会ではカントル職は高位聖職の一つとなっている。中世後期の教会学校法では、カントル職は校長職の、後には副校長職の上位にあったが、しかし宗教改革以降に進展した教会の世俗化は、聖職者たちの活動領域を狭めていくことにもつながった。学校では俗人の「教師」がカントルの地位をしめるようになり、教会における多声音楽はますます聖職者の資格のない「合唱隊指揮者」の手に委ねられるようになっていった〔ザルメン 1994: 22-23〕。

2) 公開演奏会とは、いわゆる入場料を取って公衆に提供される商業的演奏会のことを指し、1672年にイギリスで、1722年にはドイツ、1725年にはフランスで設立された。

3) 「白山(ピーラー・ホラ)の戦い」はボヘミアの芸術的繁栄を奪い去ることになった。それ以後は文化・言語・宗教上の植民地化が進んでいったが、その過程でボヘミア領地の自立や宗教上の自由、チェコ語の保護などは許容された。こうして30年戦争終結における1648年のヴェストファーレン条約が締結されるまでに、ボヘミア貴族の約8割に加え、およそ3万家世帯を越える市民が失われたと言われる〔ホグウッド&スマツニー1996: 217を参照〕(また18世紀マリア・テレジアの時代、ハプスブルク家はオーストリア継承戦争(1740年勃発)によってチェコ直属領のシレジアを失うとともに、1749年にはボヘミア宮廷公文書館が閉鎖、行政機関もまたウィーンに中央集権化されることになる。)

4) ザツェク(シュガー他編) 1990: 142-143.

5) ホグウッド & スマツニー 1996: 217.

6) ヨーゼフ主義、あるいはヨーゼフ精神については、〔丹後 1997: 177-184〕の第一章「ヨーゼフ主義とその歴史的意味」に詳しい。

7) 矢田 1997: 227.

8) ホグウッド&スマツニー 1996: 218.

9) 同上書: 220.

10) 矢田, 前掲書: 227.

11) PILKOVÁ 1972: 317-324. さらに18世紀のチェコにおいて民衆音楽の担い手となったのは、こうしたカントルたちの他に、地方に定住する音楽家のグループや、下層の放浪(遍歴)音楽家および楽師たちであった〔FRIC 1963: 36〕。

12) バーニーはその手記の中で、「17世紀半ば頃からチェコ地方をはじめ、ヨーロッパの至る所で、指揮者や作曲家

として、また様々な貴族の楽団の楽器奏者として活躍するチェコ人音楽家に会った」と述べている。そして「ボヘミアの人々は管楽器演奏に卓越しており、王国のザクセンではオーボエ演奏に優れ、またモラヴィア地方では特にトランペットの演奏に優れた才能を発揮している」と加えている [BURNEY 1927:184]

13) *ibid.*:180.

14) *ibid.*, 184.

15) 例えば、モラヴィア地方のカントルの音楽は、同地方における国民音楽の発展を促すものとなったが、モラヴィア地方のカントルの一人である J. シュライアー (Josef Schreier, 1718~ ?) は、モラヴィア東部のヴァラシュスコ地方の方言で書かれたテキストをもとにして《ボヘミアのバストラル・ミサ》を演奏し、更にチェコ語の歌詞に基づいてジングシュピール(《拘束のない真実》と《金の立派な自由》)を作曲した。またモラヴィア中部のハナー地方の要素は J. ペカーレク (Josef Pekárek, 1758-1820) によって、2つのジングシュピール《ヨラとマンダ》と《マレナとケドロツタ》に取り入れられた。モラヴィア地方最後の有名なカントルとなった V.J. ドゥシーク (Václav Jiří Dusík, 1771-1812) は、ジングシュピール《ヨーゼフ 世の歌》を創作した [TROJAN 1984: 115-116]

16) RACEK 1970: 11.

17) 元来「楽師」とは、古代より継承された職能集団として、音楽家内部での階層分化が齎した音楽家の地位を意味する標語で、いわゆる「音の芸術家としての音楽家」に対して、一般に下層階層が占める「単なる演奏者」を指示するものとして区別される [ザルメン 1994: 17を参照]。ただしここでは、そのような意味を直接に踏襲して用いるのではなく、むしろ限定的に民俗芸術家としての意味に近い含意で用いている [SMOLKA(ed.)1983: 439]。こうした標語を持ち出す所以は、20世紀の音楽学研究において、チェコではスメタナの音楽に対する「詩的思想的芸術家」としての評価とドヴォジャークの絶対音楽に対するこうした「民俗芸術家」としての意味での「ムジカント muzikant」という評価をもって、チェコの音楽文化の特質を2つの方向から捉えようとする考え方が、V. ヘルフェルトによって打ち出されたこととも関係してくるが [HELFERT 1936 (in 1970)], ここでは村の学校教師であるカントルたちの音楽創作について、それを芸術家による高度な洗練された音楽としてよりもむしろ「民衆の音楽」として把握するために、「ムジカント的」という標語を当てた。

チェコ音楽の本質ならびに精神性を深く理解していく上で、一つには詩的思想的な音楽の側面ともう一つには、いわゆる「民衆に根ざしたきわめて自然な器楽の響きと煌めくような色彩性」といった2つの観点をもって示すことができるヘルフェルトの考えを踏まえた上で、「ムジカント」の性格を18世紀のカントルの音楽に直接の起源を見いだすことができると考え、ここでは「民衆の精神に根ざした響き」という意味で「ムジカント的」という言葉を用いることができると考えた [HELFERT 1936 (in 1970): 200-204, およびFRIC 1963 を参照のこと]

18) 林 (南塚編) 1990: 84-85. を参照。

19) 伊東他編 1993: 522 「民族再生運動」の項を参照のこと。東欧諸国に生じた民族覚醒運動については、フス戦争とはチェコ人の民族運動の一旦を担うもので、指導者らが聖歌(カンツィオナル)を頼みに広く民衆の支持を仰ぐというかたちを取った、即ち、1415年のフスの殉教後、15世紀前半を中心にフスの意志を受け継いだ反カトリック勢力のフス派グループによって行われた運動。事の起こりは、1419年7月にプラハで急進的な司祭ジェフリツキーに率いられたフス派の示威行進が行われた際に、彼らは市庁舎を襲撃し、市参事会議員、聖職者らを市庁舎の窓から放り出したのである。因みにプラハ大学総長の職にあったフスの教えとは、イギリスのウィクリフの改革思想に強く共鳴したもので、救霊預定説を唱え、聖職者や教会の土地所有・世俗化を批判した。

20) チェコ人による民族復興については、[ザツェク 1990:144-145] を参照のこと。過去に偉大な歴史(14世紀カレル四世の時代やヤン・フスの時代)があり、これはチェコ語が使われ、チェコ文化が立派に息づいていた過去の時代を再確認・復活させるという考えである。フスの時代、ボヘミアの諸都市はカトリック教徒のドイツ人市民が大挙して脱出してしまった為に完全にチェコ化し、重要な役割を演ずるチェコ人新興ブルジョアジーの活動の場となった。この間チェコ方言はフスの手で磨きがかかれ、宗教論争で活気を与えられて豊かにされることにより大きく発展した。チェコ語は微妙な文語的表現を増すとともに、フス派教会の礼拝語に採用、次第に宮廷や都市の行政機関でも使用されるようになった [ザツェク (シュガー他編) 1990: 140-141]。

21) 同上書: 144-145. また「ボヘミア愛郷主義」に関しては [ザツェク 1990] が詳しい。

22) 林, 前掲書: 79.

23) ジョンストン1992: 472 ff. 参照。19世紀前半のライプニツ調和説, およびその後のチェコ人とドイツ人の争いは, ジョンストン『ウィーン精神』に詳しく述べられている。

24) 林, 前掲書: 80-81.

25) シュガー他編 前掲書: 17. より再引用

26) タンバイア1993: 50-52.

27) 伊東他編 1993: 499-500.

28) ザツェク, 前掲書: 146.

29) 1848年5月付, ドイツ国民議会 [フランクフルト] への出席要請に対するパラツキーの返書の内容は以下の通りである。「私はドイツ人ではありません。少なくとも私自身は, 自分がドイツ人であると認識したことはありません。私はスラヴ民族に属するチェコ人でありませぬ。わが民族は小さな民族であります, 歴史上, 常に民族としての独自性を保ち続けてきました。チェコ民族の歴史の君主は, ドイツ人君主と協調して国を統治してきましたが, チェコ人は決して自らをドイツ人であると考えたことはありません。今あなた方は, 独立国家としてのオーストリア帝国を弱体化させ, 帝国の解体をもたらそうとしています。しかしオーストリア帝国の一体制, その国家としての発展は, わがチェコ民族にとってのみならず, ヨーロッパ全体, 人類全体, そして文明そのものにとってきわめて重要なものであります。」[ボグダン 1993: 159-160. より再引用] さらにパラツキーは『ボヘミア史』5巻(1836-67)を著し, 「チェコ人は武力でローマ・カトリック教に再改宗させられたヨーロッパで唯一の民族だが, 今なおボヘミアにはフス派の精神が脈打つ」としている。

30) ジョンストン 前掲書: 459. より再引用。

31) さらに, パヴェル・シャファールは『スラヴ古代文明』(1837)を執筆し, スラヴ社会の起源の研究に生涯を捧げる一方, 演劇では, マチエイ・ストゥナが18世紀に生じた農民反乱に取材した芝居を上演し, 庶民に封建主義に反対する思想を広めた。さらに人形劇では, 周知のように, マチエイ・コベツキー(1775-1847)が民族的題材によって農民を覚醒させるのに力を注いだといえる。

32) サムソン 1996: 013-014.

33) 「民族復興期」を過ぎる1862年になると, まず「ソコル」と呼ばれるチェコ青年スポーツ団体の組織が創設されるようになり, これは体操・遠足・スポーツの趣味と実践を普及させるものとなり, 民族運動に奉仕する武器ともなった。こうして1882年以降, 6年ごと開催されたその代表者会議は, いわば壮大な愛国的示威運動と化したのである。

34) たとえば《渡し船を頼む Prosba o převoz》(1859-60)という歌は, 「おお, 親愛なる渡し守よ Aj, ty milý převozníčku」で始まるスシルの収集第288番 急流 を「合唱化」したものである。

引用・参考文献

BOGDAN, Henry (ボグダン, アンリ)

1993 『東欧の歴史』東京: 中央公論社 [原著: 1990 *Histoire des pays de L'Est des origines à nos jours*. Éditions Perrin, Paris.]

BONNOURE, Pierre (ボヌール, ピエール)

1985(1969) 『チェコスロヴァキア史』山本俊朗訳, 東京: 白水社 [原著: 1968 *Histoire de la Tchécoslovaquie*. Paris: Presses Universitaires de France.]

CLAPHAM, John

1972 *The Master Musicians Smetana*. London: J.M. Dent & Sons LTD.

DAHLHAUS, Carl

1979 “Über die Idee Nationalismus in der Musik des 19. Jahrhunderts”. *Colloquia Musicologica Idea Národnost a Novodobá Hudba* (BRNO 1972/73), PEČMAN, R. ed., pp.426-435.

FRIC, Ota

- 1963 *Vývoj hudební kultury na jihovýchodní Moravě*. Brno: Krajské Nakladatelství.
- GELLNER, Ernest (ゲルナー,アーネスト)
 1993 「今日のナショナリズム」『思想』(1993年1月号, No.823), 東京: 岩波書店。
 2000 『民族とナショナリズム』加藤節監訳, 東京: 岩波書店 [原著: *Nation and Nationalism*, 1983, Oxford: Blackwell Publishers.]
- HELFFERT, Vladimír
 1936 *Česká moderní hudba*. Olomouc.
- HERDER, Johann Gottfried
 1975(1778/79 & 1807) *Stimmen der Völker in Liedern: Volkslieder Zwei teile 1778/79*. hrsg. Heinz Rölleke, Stuttgart: Philipp Reclam Jun. Universal-Bibliothek. Nr.137/ [6] .
- HOBBSAWM, Eric & RANGER, Terence (eds.)(ホブスボウム,エリック;レンジャー,テレンス編)
 1992 『創られた伝統』(前川啓治・梶原景昭他訳), 東京: 紀伊國屋書店 [原著: 1983 *The Invention of Tradition. England*: Cambridge University Press.]
- HOGWOOD, Christopher & SMACZNY, Jan (ホグウッド,クリストファー&スマツニー,ジャン)
 1996 「ボヘミアの地」『西洋の音楽と社会6 古典派: 啓蒙時代の都市と音楽』ニール・ザスロー編, 樋口隆一監訳, 216-242頁, 音楽之友社。
- HOSTINSKÝ, Otakar
 1869 “Umění a národnost”. *Dalibor* : 1-2, 10-11, 17-18.
 (In 1974 *Otakar Hostinský. Studie a kritiky*. Praha: Československý spisovatel, pp.9-16).
 1941 (1901) *Bedřich Smetana a jeho boj o moderní českou hudbu*. Praha: Jan Laichter.
- 伊東孝之他編
 1993 『東欧を知る事典』東京: 平凡社。
- JOHNSTON, William M. (ジョンストン, W. M.)
 1992 『ウィーン精神 II: ハプスブルク帝国の思想と社会 1848-1938』井上修一・岩切正介・林部圭一共訳 東京: みすず書房 [原著: 1972 *The Austrian Mind. An Intellectual and Social History 1848-1938*. USA.]
- 南塚信吾編
 1990(1989) 『東欧の民族と文化』東京: 彩流社。
- 内藤久子
 2002 『チェコ音楽の歴史 民族の音の表徴』東京: 音楽之友社。
- OČADLÍK, Mirko & SMETANA, Robert (eds.)
 1971 *Československá Vlastivěda Díl , Umění• Svazek 3 Hudba*. Praha: Horizont.
- PILKOVÁ, Zdeňka
 1972 “Dramatic Music”. *Colloquium Musica Bohemica et Europaea Brno 1970*. pp.317-324.
- RACEK, Jan
 1970 “Česká Hudba a Regionalismus”. *Sborník Prací Filosofické Fakulty Brněnské University H5*, pp.7-20.
- SALMEN, Walter (ザルメン, ヴァルター)
 1994 『音楽家の誕生 中世から現代までの音楽の社会史』(上尾信也・加藤博子訳), 東京: 羊泉社。
- SAMSON, Jim (サムソン,ジム)
 1996 「中央ヨーロッパ東部: 民族的アイデンティティ獲得への苦闘」『西洋の音楽と社会9 後期ロマン派 : 世紀末とナショナリズム』ジム・サムソン編, 三宅幸夫監訳, 9-41頁, 音楽之友社。
- 薩摩秀登
 1991 『王剣と貴族 中世チェコにみる中欧の国家』東京: 日本エディタースクール出版部。
- SMETANA, Robert (ed.)
 1972 *Dějiny české hudební kultury 1890-1945, Díl : 1890-1918* [チェコ音楽文化史]. Praha: Academia,

Československá Akademie Věd.

SMOLKA, Jaroslav(ed.)

1983 *Malá Encyklopedie Hudby. Praha: Editio Supraphon.*

SUGAR, Peter, F. & LEDERER, Ivo J. (eds.)(シュガー, P.F. & レデラー, I.J.編)

1990(1981) 『東欧のナショナリズム 歴史と現在』東欧史研究会訳, 東京: 刀水書房 [原著: 1969 *Nationalism in Eastern Europe*. U.S.A.: University of Washington Press.]

TAMBIAH, Stanley J. (タンバイア,スタンリーJ.)

1993 「エスノ・ナショナリズム 政治と文化」『思想』1993年1月号, No.823(岡本真佐子訳), 東京: 岩波書店, 50-63頁。

丹後杏一

1997 『ハプスブルク帝国の近代化とヨーゼフ主義』東京: 多賀出版。

TROJAN, Jan

1984 "Kantoři na Moravě a jejich hudební aktivita v 18 & 19 století úvodní črta k širší problematice z regionalní hudební historie. " *Sborník Prací FFBU H* 19-20, pp.113-118

ZACEK, Josef F. (ザツェク, ヨーゼフ・F.)

1990(1981)「チェコスロヴァキアのナショナリズム」『東欧のナショナリズム 歴史と現在』P.F. シュガー& I.J. レデラー編(東欧史研究会編), pp. 136-192。

(2005年10月19日受理)